

「なぜ」が言えるか

2026・1・14 重枝 一郎

「自律的学習者」という最上位の目標に筋を通すことが、タイトルの「なぜが言えるか」につながる。生徒を「自律的学習者」にするためには、生徒が主体となって、授業・行事・生徒会・部活動などにおいて、自分の意見を表明し、実現していくプロセスが重要であり、それを大人は伴走していくことになる。

5年前くらいだろうか、経産省「未来の教室」事業において、「ルールメイキング」という言葉が使われるようになった。主に中高で、校則検討委員会なるものを立ち上げ、生徒・保護者・教師が対話的に見直していくことが求められた。当時、福岡市では必ず会議体で検討することになっていた。ただ、それこそ「なぜ」するのかということは、どこまで考えられていたのだろうかという疑問はある。

では、「なぜ」このルールメイキングをするのかということであるが、私は校則における納得解をつくるプロセスを経験する中で、社会で必要な課題発見力やコンセンサス力、自己効力感などを育む目的だと考えている。つまり、校則をどう変えたかということではなく、どのような対話のプロセスを歩んだかということになる。

生徒にとって、異なる価値観の持ち主と互いに尊重し話し合うことは、自分と他者の違いを知る機会になり、自己理解を深めるチャンスになる。日常の教室のルール・マナー作りも同じことが言える。私はそのタイミングで、「自分よしなのか・相手よしなのか・みんなよしなのか」という言葉を問いかけ、生徒の思考を活性化していた。

本校も教師間の会議体「みらいのカタチ委員会」で制服について話し合っていた。その後、生徒主体にするために「セーラー服検討委員会」を発足させている。この会では、「なぜこの制服なのか」を語ることを目標にしている。もちろん機能性・デザイン性なども話し合い、課題も上げていく。制服業者にも参加してもらったこともある。このような話し合いでは、最初から結論を求めず、思いや考えを言葉にできる安心・安全なチームづくりが重要になる。多様な他者との対話や交流を通して、それぞれの思いや疑問が意見になり、その意見を交流させる。

制服については、「時報 MISSION」の企画で、生徒・保護者・教師の三者での対談を行った。その記事はみんな読んだと思う。今現在の制服の話し合いの背景には、人権や多様性を意識しなくてはならない空気がある。でも、実際の話し合いでは、制服を変えることが全てではなく、対話しながら考えを深めていこうとしていた。結果、「ユニホームポリシー」という形にしてみようという目標が生まれた。

私たちの日常で「これまで通り」という文化はある。「これまで通り」だと、見通しをもちやすいし、安定した結果が得られやすい。ただ、形骸化や停滞を招きやすいという側面もある。これは「学校あるある」である。しかし、今の世の中は、「変化しなければ」のマインドは強くなっている。先生たちも「これまで通り」を見直す必要性を感じつつも、現状を変えられないジレンマが伺える。でも、私たちの日常は変化の連続である。変化には、大きく変化する場合もあれば、小さく変化する場合もある。

私は、変えるマインドの肝になるのは、「なぜ」が言えるかどうかということだと思う。これまでそうだったことに対して「なぜ」が言えなければ、「なぜ」が言えるように変えてみる方がいいと思う。

校則では「なぜ」が説明しにくい時があるが、教室のルール・マナーは、生徒との対話でその語りを生み出すことができる。「なぜ」を語るためのプロセスを大事にしたい。